本願酬報の意義

江上浄信

仏教は本来宗教として、生死の出離を求めて止まない人間の実存の問題と深く関わるものである。その限り究極的真理として高く掲げられる真如の世界から、全く根源的に引き離されてあるような絶望的な人間の上にも、根源的真理と深く関わることによって、信仰的実存を確立する道が開かれなければならない。信仰的実存の確立という根源的な問題を離れて、真理の優位性が誇示されるならば、それは人間の実存にとって全く無関係な観念的遊戯に堕し、仏教本来のもつ批判精神を喪失した空虚なものとして形骸化せざるを得ない。

宗祖は『教行信証』別序（『親鸞聖人全集』教行信証九五頁）に

「末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し」

と自性唯心に沈み、定散の自心に迷う二機が課題とされている。それは「末代の道俗、近世の宗師」という歴史的事実を指すことは勿論であるが、そうした批判は、ただ単にその事情に対する批判にとどまるものではなく、むしろ自・他を包んでそうした躓きとしての事実を起さしめる人間存在の根源的問題に関わるものというべきであろう。しかもその問題は結句するところ一切衆生の帰趣の世界としての真仏真土が領受せられないところにあるのであって、真仏真土の持つ深い宗教的意味が明らかにされなければならない。ここでは宗祖が感得せられた真仏土が大悲の誓願

に酬報するが故に報仏土といわれる意義について、「真仏土巻」を中心に「証巻」「化身土巻」との関係をも窺いながら領解していきたいと思うのである。

一

『教行信証』「証巻」（『親全』教行信証一九五頁）に

「謹んで真実証を顕さば、則ち是れ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり」

といって、煩悩成就の凡夫、生死罪濁の羣萌が往相廻向の心行を獲ることによって、浄土に往生して開く究極の証果が無上涅槃であるとあらわされている。涅槃は絶対の境地であって、われわれが真に安んずる境地である。それは絶対の境地として、われわれの帰趣の世界であるとともに、如来の本来の境地である。それ故に、更に「証巻」には滅度について

「必らず滅度に至るは即ち是れ常楽なり、常楽は即ち畢竟寂滅なり、寂滅は即ち是れ無上涅槃なり、無上涅槃は即ち是れ無為法身なり、無為法身は即ち是れ実相なり、実相は即ち是れ法性なり、法性は即ち是れ真如なり、真如は即ち是れ一如なり」（『親全』教行信証一九五頁）

と転釈し、無上涅槃の極果としての真実証が絶対の境地であることをあらわされるとともに、その無上涅槃の内実が如何なるものであるかをあらわそうとされたのである。

一如は『唯信鈔文意』（『親全』和文篇二〇二頁）に「いろもなし、かたちもましまさず、しかればこころもおよばれず、ことばもたへたり」といわれるように、如何なる表現をも超絶した世界である。それ故、宗祖にあって転釈の一々の言葉は、涅槃をあらわす言葉として、浄土の経釈に伝承され来たったものを駆使し、それを次々と想起して、言葉に

秘められ言葉を超え、一切の思議を超えた涅槃を象徴するより外になかったのであろう。それはどれ程説いても全て空しいといわざるを得ないような世界、われわれをして沈黙せしめる世界といわなければならない。しかも無上涅槃は一切の帰趣であるとともに、そこから一切の存在が湧出するような根源であることを示すのである。而して、その沈黙の世界から言葉の世界に出てきたものが

「然れば弥陀如来は如より来生して、報応化種々の身を示現したまふなり」（『親全』教行信証一九五頁）

と説かれるものであり、如そのものが如という沈黙を破って、われわれの上に積極的に自らを示現して来るものである。まことに阿弥陀は従如来生せられるのであって、その如から来たところの如来、浄土という意味を明らかにするのが、仏身仏土としての「真仏土巻」「化身土巻」である。

仏身仏土は能帰の機に対する所帰の身土として、帰命・願生の機に対する無碍光如来・安楽国である。帰命・願生と無碍光如来・願生安楽国との関係は、相対する二世界として静止的関係にあるのではなく、無碍光如来・安楽国は帰命・願生の機に信仰的実存の確立を開示してくる根源的力用の世界である。このような動的往還的意義を明らかにするものが「真仏土巻」「化身土巻」の関係である。それ故真仏真土は帰命・願生の行における讃仰の境界であり、純一なる一心において領受される彼岸の世界でありつつ、しかも、それは現実的には限りなく方便化身土として積極的に自己矛盾的な在り方を厳しく批判し、衆生の行信を純一無雑ならしめるのである。されば真仏土・化身土は、往還二廻向により成就する行信によって能証される所証の境界である。

思うに、われわれの現実の世界は、愛憎の二縁による善悪の業を因として、雑多なる苦楽の果を感ぜざるを得ない。業因千差なれば果もまた万別ならざるを得ない業道自然の世界であり、何人たりともそれを避けることは許されないのである。如来はこのような衆生界を大悲し、それを深く内に摂して本願を発起されたのである。それ故、大悲の本

願は、本願それ自体の現働をもって、衆生を救済しようとされるのである。いいかえれば、大願業力の自然により、平等一如の無為自然の世界に帰らしめんとするのであり、ここに因願酬報の仏身仏土が現成するのである。それ故、仏身仏土は衆生に即していえば如来の願力によって帰趣せしめられる無為自然の世界であり、如来に即していえば、衆生救済の場として、願心によって荘厳されたる大涅槃界である。即ち衆生は本願に招喚されて業道の自然なることを深信するのであり、その深信において無為自然を彼岸の仏土として帰命願生するのである。

二

宗祖は「真仏土巻」に、「光明無量之願、寿命無量之願」(『親全』教行信証二二七頁)と二願を標挙し、

「謹んで真仏土を按ずれば、仏は則ち是れ不可思議光如来なり、土は亦是れ無量光明土なり。然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に、真の報仏土と曰ふなり。既にして願有す、光明寿命の願是れなり」

といわれている。ここに「然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土と曰ふなり」と示されるところに注意せしめられるが、因願酬報説は、夙に善導が同時代の先輩である浄影寺慧遠、嘉祥寺吉蔵等の諸師の仏身仏土説に対し、自己の生存の可否を賭けて厳しく対決していった是報非化の論に顕わされたものである。

善導出世の時代は既に末法に入って数十年、澆末五濁が襲い来たれる時代であった。その師道綽が「大聖を去ること遙遠なるが故に」「理深解微の故に」という二由を挙げ、聖道難証を提唱し、「我が末法の時の中の億々の衆生、行を起し道を修せんに、未だ一人も得る者有らず」の痛嘆を眼前にした善導にとっては、濁世末代の意識はいよいよ深く、ことに自己省察は痛烈を極め、深刻悲痛なる世界観人生観を形成せざるを得なかったのである。善導の内奥には、『帰三宝偈』劈頭の

「道俗時衆等、各無上心を発せども、生死甚だ厭ひ難く、仏法復欣ひ難し」（『親全』加点篇3・三頁）

の告白に見られるように、此土を厭うということが真に厭い切ることができるか、浄土を求めるということが真に求め得ることができるかという根源的な問題が問われていたのであろう。抜き差しならない業縁の世界が、自己の現実相を厳しく批判してくるのである。まことに現実は「貪瞋邪偽、奸詐百端にして悪性侵め難し、事蛇蝎に同じ。三業を起すと雖も、名づけて雑毒の善と為す。亦虚仮の行と名づく、真実の業と名づけざるなり」である。このような人間存在の在り方を、善導は「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫已来常に殃し常に流転して出離の縁有ることなし」と見出されたのである。しかもこの痛みのみが「彼の阿弥陀仏の四十八願をもて衆生を摂受したまふこと、疑なし慮りなし、彼の願力に乗じて、定めて往生を得」と深信するのであって

「我等愚癡の身にして、曠劫より来た流転せり、今釈迦仏の、末法の遺跡、弥陀の本誓願、極楽の要門に逢へり」（『親全』加点篇3・四頁）

と表白されたのである。ここにこそ因願酬報が善導自身の上に見開らかしめられたのであるといえよう。

諸師において、浄土を高く報土と判ずるものは凡夫の往生を許さず、また凡夫の往生を許すものは浄土を低く、しかも応土と判ずるのである。それに対して善導は、先に触れたように、具体的現実的には曠劫已来流転輪廻の自己自身の上に、既に生死を出離する道が開かれていたという事実に立って、機を貪瞋具足の凡夫と甚だ低く、しかも浄土を報法高妙の報土とし、『玄義分』会通二乗種不生義に是報非化の論を展開したのである。即ち「弥陀の浄国は為当是れ報なりとせむや是れ化なりとせむや」（『親全』加点篇3・三二頁）の問に対し

「是れ報にして化に非ず」

と答え、次に「云何が知ることを得る」といって、教証として報身報土の根拠を『大乗同性経』によって

「西方安楽の阿弥陀仏は是れ報仏報土なり」（『親全』加点篇3・三二頁）

と述べ、次いで報身報土の意義を『大無量寿経』第十八願文を取意加減し、

「法蔵比丘世饒王仏の所に在して、菩薩の道を行じたまひし時、四十八願を発しき。一々に願じて言はく、若し我仏を得むに、十方の衆生我が名号を称して、我国に生れむと願じて、下十念に至るまで若し生れずば正覚を取らじ。今既に成仏したまへり。是酬因之身なり」（『親全』加点篇3・三二頁）

と、四十八願の一々の願に十八願の意があり、阿弥陀仏が因願酬報の報身であることが示されている。阿弥陀仏とは『往生礼讃』にいわれるように「彼の仏の光明無量にして十方の国を照らしたまふに障碍する所なし。唯念仏の衆生を観して摂取して捨てたまはず。故に阿弥陀と名づく。彼の仏の寿命、及び其の人民も無量無辺阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づく」であって、それはまさしく「我が名号を称して、我国に生れむと願じて、下十念に至るまで若し生れずば正覚を取らじ」との大悲の本質そのものである。蓋し、如来は真如に入出自在であって智慧あるが故に生死に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住せずして無住処涅槃を行ずるのである。大乗仏教の理念として空勝義の真実は、教法を通して自らを必然的に世俗の世界にあらわし、それによって世俗の世界は空勝義に照らされて摂取されるのである。このような空勝義の世間的実用が慈悲といわれ、空勝義の智慧は必然的に利他の慈悲としてはたらくのであって、そこに大乗の菩薩行がある。報身という如来の態は空勝義の真実智慧が世俗に媒介される慈悲的性格を示すものであって、それは常に空勝義の世俗的実践としての菩薩行としてあらわされる外はない。ここに法蔵菩薩の菩薩行を顕わすものが四十八願とその成就であり、その願に酬報の如来が阿弥陀如来である。如来が真如より来生する態であり、如来として来生するのは菩薩行を通してであると同様に、浄土もこのような菩薩行によって酬報した世界、本願成就の報土であって、如来の智慧清浄業により成就せられた世界であることを強調されている。

更に『観経』上輩の文を引用して

「上輩の三人命終の時に臨んで、皆な阿弥陀仏及び化仏と与に此の人を来迎す」（『親全』加点篇3・三二頁）

と、上三品の往生人を矜哀して、本仏が化仏を伴って来迎せられるのであるから、本仏は報身でなければならない。先の『大経』の引文が因を挙げて示されるに対し、『観経』の引文は果を挙げて報身の義を証誠されるのである。ここに来迎の相により報身を顕わそうとされるのは、真如法性の方便応化の原理を『観経』の上に具体的に見出されたからに外ならないのであって、善導の是報非化を顕される引文の意趣は『大経』第十八願加減の文に示される因願酬報に結帰されるといっていい。報とは、

「因行虚しからず、定んで来果を招く、果を以って因に応ず、故に名けて報と為す」（『親全』加点篇3・三三頁）

といわれるように、阿弥陀仏は四十八願別しては第十八願の因行虚しからず阿弥陀仏となられたのであるから、まさしく報身であり、土はまた報土でなければならない。

報土の報土である所以は、第十八願加減の文に見られるところであるが、凡夫入報を明かす問答にも窺うことができる。即ち

「問うて曰く彼の仏及び土既に報と言ふは、報法は高妙にして小聖は階ひ難し、垢障の凡夫云何が入ることを得んや。答えて曰く若し衆生の垢障を論ぜば、欣趣し難し、正しく仏願に託するに由て、以って強縁と作りて、五乗をして斉しく入らしむることを致す。」（『親全』加点篇3三六頁）

と、垢障の衆生は煩悩に覆われ、浄土を欣いつつも真に浄土を欣趣することは難い。仏の本願はその欣趣しがたき衆生を見透しつつ、その衆生を願力の強縁によって浄土に往生せしめられるのである。まことに浄土成立の原理は願力所成なるが故にである。更に報土の体について、『観音授記経』の阿弥陀仏の入不入涅槃の間を縁とし『大品般若経』

を引証し、涅槃如化ということによって、却って弥陀の妙果無上涅槃であり、極楽無為涅槃界とあらわされている。

上来、善導の是報非化の論、因願酬報について縷説してきたのであるが、それが宗祖にあっては、「大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土と曰ふなり」と領受せられたのである。ここに大悲の本願に酬報する仏土の意趣が具体的に真仏土・化身土として明らかにされてくるのである。

真仏土は何故に化身土をあらわさねばならないのであろうか。それは機に応ぜんがために外ならない。無明煩悩に覆われ、智眼暗き衆生は、事理に疑をもち邪まの意見に惑わされて動乱し、浄土を求めつつも真の浄土を了知しないが故に生死に流転するより外にはない。しかし如来の願心は大悲の智慧なればこそ、こうした衆生の現実を内包し、衆生の虚仮不実を知って、それを虚仮不実と批判するとともに、更に深く虚仮不実の衆生を引導摂受せんとされるのである。この大悲心が転出して第十九、二十の方便の願が出生したのである。

されば衆生の生あるところは、すべて大悲の願のとどかざるところはなく、何処たりとも本願酬報の世界とならざるところはない。ここに

「然れば大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土と曰ふなり」（『親全』教行信証二二七頁）

ということは

「真仮皆是れ大悲の願海に酬報せり、故に知んぬ報仏土なり」（『親全』教行信証二六六頁）

という領受と別なものではないであろう。蓋し、このことは真仏土・化身土の分判の意義を払拭し去ることではない。真化分判といっても、それはただ単に外観的に簡別されるのではなく、それはあくまで主体的領受においてこそ成り立つものであって、「仏土に就いて真有り仮有り」は、「願海に就いて真有り仮有り」という願心領受の一心においていわれるものである。したがって仏土の真仮分別は「真仮皆な是れ大悲の願海に酬報せり」と領受することの外に

ないのである。まことに「我も亦彼の摂取の中に在れども、煩悩に眼を障へて見たてまつらずと雖も、大悲倦きこと無くして常に我を照したまふ」のである。かくて衆生各別の業因による破壊動乱のこの世界は、大悲の光に摂取せられて方便化身土たらしめられる。衆生往生の縁は方便の願により結ばれ、真実報土への帰入は方便化身土によって果遂されるのである。若し方便化身土がなければ、われわれの救済されるべき手がかりはないであろう。この意味において方便化身土は、まことに如来広大の恩徳である。しかし、それはただ如実に方便化身土と知られることにおいてである。而して方便化身土を方便化身土と知らしめるものは真実報土である。如来の大悲の願心は破壊動乱の世界を方便化身土たらしめることによってのみ、一切衆生を摂取して真仏土を成就されるのである。されば

「真仮皆な是れ大悲の願海に酬報せり」

と領受されることは、自ら深く「真仮を知らざるに由って、如来広大の恩徳を迷失す」というわが身の悲嘆と、三願転入の文に示される「爰に久しく願海に入りて深く仏恩を知れり」という歓喜に見られる悲喜交流の一心においてのみ心証され得るものである。

まことに方便化身土は衆生の機に応ぜんがためであって、如来の大悲願心においては、すべてが真実報土である。このことを説示するものが「真仏土巻」劈頭に標挙された光量無量・寿命無量の二願の意である。

三

思うに真仏真土は、光明無量の願に酬報すればこそ、南無の機に「不可思議光如来」と顕われ、願生の心に「無量光明土」と仰がれるのである。帰命願生の機は無明の闇に閉され、如何なる方向にも光を見失える存在である。その衆生に純一無雑なる南無・願生の行信が成就することは、衆生が無縁に縁ずる光に照らされることによってである。

それ故に

「設ひ我仏を得たらんに、光明能く限量有りて、下百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば正覚を取らじ」

と誓われた第十二願は

「無量光仏・無辺光仏・無碍光仏・無対光仏・炎王光仏・清浄光仏・歓喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏」

と、われわれの種々の煩悩を対治する、それぞれの光の徳として現われ、

「其れ衆生有りて、斯の光に遇う者は、三垢消滅し、身意柔輭にして、歓喜踊躍し善心生ず」

と、如来の光明によって仏智疑惑の分別心が根柢から砕かれ、そこに柔輭心の成就せられた無数の仏弟子によって大悲の本願が聞き開かれる。それ故に第十四願にあっては究竟化したところの真の声聞無数が誓われている。しかも

「若し三途勤苦の処に在りて、此の光明を見れば、皆な休息を得て、復た苦悩無けん。寿終へて後、皆な解脱を蒙る」

と衆生三途勤苦の処に成就するのであって、この成就の世界に真仏土は仰がれる。それは南無・願生の機に仰がれる彼岸の光ではあるが、そこに真仏土は現成する。まことに彼岸の世界としての真仏土は、三界を超過すればこそ限りなく三界の光となるのであり、衆生は三界の光を見失えばこそ浄土の光が仰がれるのである。而してこの光を仰ぐことにより、光なき衆生は光の世界に生れるのである。

まことに光明無量の願はわれわれの自力我慢を砕くことにおいて、真の仏弟子たらしめ、往相の証果を必然するものであり、それは「行巻」(『親全』教行信証七〇頁)に「爾れば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速かに無明光明土に至りて大般涅槃を証し、普賢の徳に遵うなり。

知るべし」といわれる世界である。ここに「知るべし」の語が、われわれに厳しく響いてくる。

蓋し、宗祖は「真仏土を按ずれば、仏は則ち是れ不可思議光如来なり、土はまた是れ無量光明土なり」と、如来も浄土も光明として顕わされ、寿命は隠されているといっていい。このことはまた「真仏土巻」の引文においても、光明を証する引文が寿命を証する引文に比して遙かに多いことにも窺われる。即ち、寿命無量を証する引文は、『大経』の第十三願の文、同成就の文、『不空羂索神変真言経』の寿命無量の文の三文であるに対し、光明無量を証する文は、『大経』の第十二願の文、同成就の文、『如来会』の第十二願文、『平等覚経』の無量光明の文、『大阿弥陀経』の第十二願成就の文、『讃弥陀偈』の文、『述文賛』の十二光名義の文等多数に及ぶのである。この所以は『末灯鈔』に

「寿命無量を体として、光明無量の徳用をはなれたまはざれば」（『親全』書簡篇九三頁）

といい、また第十二願成就の文の十二光仏を顕わされるにあたっても

「無量寿仏は無量光仏・無辺光仏・無碍光仏（乃至）無称光仏・超日月光仏と号す」

といわれるように、寿命無量が浄土の顕相であり、用である光明無量の世界を成就せしめる根柢の世界として内面的意義をもつものといっていいであろう。さればその寿命無量の願の世界は、如何にわれわれにあらわれるものであろうか。

光明無量の世界としての真仏土を彼岸に仰ぐ帰命願生の機は、智慧の光明に照らされ無明の黒闇を深信するものである。しかし無明の黒闇を知りつつも、そこに無限の光を疑わしめないものは、より一層深く根源的な力の現働が感知されるからに外ならない。ここにこそ浄土の体として寿命無量の願酬報の意義があると思われる。

第十三願には

「設ひ我仏を得たらんに、寿命能く限量有りて、下百千億那由他の劫に至らば、正覚を取らじ」

と誓われ、また『阿弥陀経』には

「彼の仏の寿命、及び其の人民も無量無辺阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づく」

と説かれ、阿弥陀とは単に自己のみが寿命無量なるが故に阿弥陀といわれるものでなく、彼の国の人民もまた仏と同じく寿命無量であるが故に、阿弥陀といわれなければならない。それ故に本願には十三願に続いて第十五願には同じく眷属の長寿が誓われている。而してこの場合、彼の国の人民といい、眷属というものは、直接には浄土への往生者を指し、具体的には「十方群生海」にまで及ぶものといっていい。されば阿弥陀は自己のみが寿命無量であるに止まらず、同時に自己のほかのすべてを自己と同じく寿命無量ならしめなかったならば、真に阿弥陀とはいえないこととなる。まことに如来の寿命は衆生の罪を我が罪とし、衆生の悩みを我が悩みとするものであり、それは具体的にわれわれが流転し苦悩していかざるを得ない、この現実世界こそ如来の真実が働く場所である。寿命無量は法蔵菩薩となってわれわれの上に働くのであり、このことをあらわすものが、『歎仏偈』の最後に

「仮令身を諸の苦毒の中に止るとも、我が行は精進にして忍びて終に悔いざらん」

という誓いである。もし法蔵菩薩なくば純一無雑の南無・願生の機は成就し得ない。寿命無量の願に酬報する如来の現働において、苦悩の衆生界が、そのまま方便化身土たらしめられるのである。まことに寿命無量の願に酬報して、因位法蔵菩薩は誕生し、大悲方便化身土が顕出したのであり、光明無量の願に酬報して果上の不可思議光如来は成就し、無量光明土が荘厳せられたと思念せしめられる。いうまでもなく寿命無量の願は真仏土の願であるから

「仏は無量寿仏観経の如し、真身観の仏是れなり。土は観経の浄土是れなり」(『親全』教行信証二六九頁)

といわれる方便化身土が、直ちに寿命無量の願酬報ということはできない。しかし「設ひ我仏を得たらんに寿命能く限量有りて、下百千億那由他の劫に至らば、正覚を取らじ」との誓いは、衆生の罪を自らの罪とし、衆生の悩みを自

らの悩みとして大悲同感されるからで、そのすべてを内に摂することによって、如来自らの寿命無量を成就せんとするものである。されば苦悩の群生海を大悲摂取される世界こそ方便化身土といっていい。従って方便化身土の願は第十九・二十の二願であるが、この二願の方便をもって衆生を摂取せんとされる根源には、如来自らを成就せんとの願が働くからに外ならない。

四

凡そ『観経』の顕説にあって、真身観の仏は定善所観の境にあらわれる八万四千の相好をもつ六十万億那由他の仏身であり、仏土もまた定善観想の境にあらわれる仏土である。この仏身土が化身土といわれる所以は、それが有数量として定善観想にあらわれるからであって、その限り選捨さるべき世界である。しかし、そこにこそ宗祖は大悲の本願の摂取不捨の働きを感得されて隠彰の義をあらわされたのである。摂取不捨とは「せふはおさめとる、しゆはむかえとる」であり、「せふはもののにぐるをおわえとるなり」「ひとたびとりてながくすてぬ」という意で、一切衆生を摂取する働きこそ如来の寿命である。かくて仮土をして真に方便化身土たらしめる隠彰の世界は、寿命無量の願の酬報する報仏土であり、ここに「真仮皆な是れ大悲の願海に酬報せり、故に知んぬ報仏土なり」といわれるのである。

まことに寿命無量の仏土は、如来についていえば、如来が衆生と同化せんとされる世界であり、同時に衆生にあっては、自己自身無限の過去から全く無明の闇に閉され、永遠に仏と縁なく、如来に背ける罪業を荷負する存在と深信せしめられる世界である。従って寿命無量の願酬報とは、如来が衆生と同化せんとされる相においては因位の法蔵菩薩であり、同時に衆生が自己自身を深信するにおいては、無量寿如来として帰命せしめられるといっていいであろう。無量寿如来に帰命せしめられる、その能帰の根源的主体は法蔵菩薩であり、法蔵菩薩を通して無量寿如来に帰命せし

められるのである。ここに純粋なる帰命・願生の行信は、衆生の心でないことを心証せしめられるのであって、「行巻」に「十方群生海、斯の行信に帰命すれば、摂取して捨てざるが故に阿弥陀仏と名づく、是れを他力と曰ふ」といわれる意趣が窺知される。更には還相廻向の根源をここに見出すことができよう。

而して如来に即していえば、光明無量・寿命無量の願がなければ、選択本願の発起も成就も有り得ないといえよう。宗祖が『正像末和讃』(『親全』和讃篇一六七頁)に

「超世無上に摂取し　選択五劫思惟して　光明寿命の誓願を　大悲の本としたまへり」

と、大悲の本としての光寿二無量の願を讃嘆された所以が窺われる。更に第十七願に

「設ひ我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、悉く咨嗟して我が名を称せずば、正覚を取らじ」

と誓われた十方世界の無量の諸仏の称名も、また第十八願に

「設ひ我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信楽して我が国に生れんと欲ふて、乃至十念せん。若し生れずば正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗するとをば除く」

と誓われた十方衆生の聞信も、そこに如来自身を成就せんとする光寿二無量の願あってこそと領解される。

かくて一切衆生の上に帰命・願生の行信が成就するところに尽十方無碍光如来、安楽国なる真仏真土が酬報する。即ち大悲の本願は衆生の行信として南無阿弥陀仏と廻向し、その行信のところに報仏土たる南無阿弥陀仏を酬報するのである。まことに真仏土は、本願力廻向の行信により受用される世界であるとともに、一如法界より真身を顕わすべき世界として、本願力廻向の根源であり、したがって、それは大悲の本願に酬報せる一切衆生の帰趣の世界として、弥陀同体の領域であると窺われるのである。

三・四の領解は、『親鸞の浄土観』(幡谷明著)、『宿業と大悲』(広瀬杲著)に依るものが多い。記して厚く謝意を表する。